病院図書室　19(3):107-108, 1999

巻頭言

情報と図書室―広がる夢、そして厳しい現実―

国立京都病院長　粉川 皓仲
ﾒｰﾙｱﾄﾞﾚｽ:kkogawa @kyoto.hosp.go.jp

この度、牧野尚彦先生の後を引継ぎ、近畿病院図書室協議会の会長をお引き受けすることになった。始めて手にした「病院図書室」という機関誌を拝見すると、大半は近畿地区の病院であるが、北は青森、南は鹿児島まで、124の病院が参加している大集団ということが分かった。

面識ある方も少なく、牧野前会長、小田中徹也さん、最近お目にかかったばかりの森川治美さんのお三人しかいない。本会の今までの活動状況も、詳細については、まだ十分に把握しているわけではない。そんな状態のため新会長就任の挨拶も、ひょっとすると全くの的外れになりかねない。それを覚悟で図書室、特に情報との関係で考えていることを申し述べたいと思う。

私達の周囲の日常を眺めてみると、いかに多くの情報に取り囲まれ生活しているか、改めてびっくりする。そして多くの場合、それらの情報に振り回されて、いかに多くの時間を消費させられていることか。このことは、この会のメンバーの方々は、特に痛感されているに違いない。公的、私的な文書類から、各種の報告物、一方的に掛ってくる電話の数々、そして爆発的に使用され始めたコンピュータ情報網、怖いのはそれほど重要でないと判っていても、全くは無視できないことである。最重要な情報が潜んでいる可能性があり、朝令暮改を見逃しては大変である。かってはこちらが必要な情報を探したが、最近は選択権は先方にある。仕方なく自動的に漏れのないよう、自己防衛の網を張り巡らせようとする。当然のことながら、集まる情報は玉石混淆とならざるをえない。

いきなり大上段に振りかぶって申し訳ないが、情報の価値は「それによってその人の生活が豊かになるかどうか」、これが一つの判断基準になると思う。日常生活では今以上の情報が本当に必要かどうか極めて疑わしい。ましてや情報発信など、電話そして時々使用するFax.があればほとんど不都合は生じない。そんなことはない。そんな考えは時代遅れとおっしゃる方は情報に関して相当のプロに違いない。

病院で過ごす私の情報の質と量、そして必要度、これは家庭で日常生活を送る私のそれらとは全く異なるレベルである。病院で今パソコン、ワープロがないと、できる仕事の量はゼロに近い。質に至ってはマイナスになっているかもしれない。

そんなことを考えていると、情報の価値はそれ自体が持っている価値以外に、それを扱う側の能力によっていろいろ変わってきそうである。今すぐ直接役に立つという価値と、

廻りまわって出てくるような、間接的な価値を持つ情報もありそうである。現今の日常生活では後者のような情報はまず必要ないが、かってはこのような情報が珍重され、密かに求められていたように思う。

どんな情報が良い情報なのだろうか。まず利用する側にとって価値があると思われるものは文句なく良い情報だろう。正確さも必須だろうし、新しさも多分大きな条件になる。しかし古くても初めて接する情報は新しい。いわゆる古典はこの類である。入手しやすいことも大切な条件である。インターネットは情報の宝庫だといわれても、コンピュータの扱いを知らなければ価値はない。

厄介な問題もある。有り余る情報をどうするか、頭の痛いことだ。この点は人間の身体がどのようにして活動し、休息しているかを考えると参考になる。外界からの、あるいは直接、間接に体内からの刺激（情報）によって、活動レベルが決定されている。多すぎると活動過多となる、つまり不眠になる。多すぎる情報によって我々が受ける最大の被害は、生体でいう不眠と同じ重大な結果である。

このところ情報整理に関する書物が多く出版されている。あれこれ方法は述べられているようだが、どうやら結論は一つ、情報を捨て去る勇気を持つかどうかのようである。我が家にも料理や園芸の古くなった雑誌の特集号が本棚に残っている。こんな特集は、2，3年に一度は出るのだからと家内を説得してやっと処分する。超のつく情報整理の本もあるが、医師の立場から見ると一つ見落としている点があるように思う。それはその人の性格がどうか、具体的には捨てることのできない性格の人に、情報を処分せよと言ってできるかどうか、小さい問題ではない。一時しのぎの処分を考える、いい考えのようだが、継続したときに混乱が起きることは目に見えている。

そろそろ図書室について考えてみたい。かっての図書室はその名の通り、図書の整理、要するに保存に主力を注いだ。国会図書館ならいざ知らず、少ない予算で買ってもらった図書を、後生大事に保管することに懸命であった。今でも一つの科、一人の医師が読むために、しかも「今まで続けてきた」という理由で、高価な雑誌を購入し続けている図書室があると思う。資源には限界があるという言葉が幅をきかせている（つい最近まで聖域とされていた医療費さえカットされる。脳死を巡る深刻な論議を聞けばその重大性が分かる）。それなのにかっての図書室の原点（最良のモデル）として、今も運営しようとしてはいないだろうか。そうは云っても、正直私には図書室はどうあるべきかよくは分からない。だがこのままでは駄目だということは間違いないと思う。真剣に、本気で取り組まないと、図書室が合理化、経済性の大渦に巻き込まれる日はそう遠くない感じがする。

今後の図書室の在り方、夢を語ることになりそうだが、楽しい結論に近づいてきた。まず取り組むことはこの会を、名実共に「公的」なものにすることだろうと思う。もう趣味的な、奉仕の精神では太刀打ちできない。それだけ図書室の役割が質、量共に以前とは比較にならないほど、増大しているのである。